

え 英断を少子対策待たなし
 ≪日本の少子化問題≫

2014年の日本の出生数は戦後最低の100.1万人と推定され、第二次ベビーブームといわれた1973年の209.2万人の半分以下となっています。止まらない日本の少子化は、経済活動の衰退や社会保障の破綻につながる大きな社会問題です。

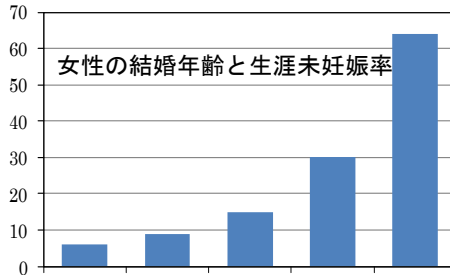
私たちがのような産科医が少子化を憂えることは、自分の主張が社会の利益であるのみならず、自分たちの利益にも合致している点である意味健全です。ちょうど自動車保険の会社が「交通事故に気をつけましょう」というのが好感をもって迎えられるのと同じです。JTが「たばこの吸いすぎに注意しましょう」というのとは異なります。

少子化問題の本質は、若い人たちの未婚化、晩婚化に帰せられます。1980年には30～34歳の女性の未婚率は9.1%でしたが、2010年には34.5%まで上昇しています。35～39歳の女性でも5.5%から23.1%に上昇しています。妊娠が難しくなるこの年代で4人に1人が未婚ということなのです。

若い人が結婚や出産にふみきらない理由として、非正規雇用の拡大などによる経済的問題も当然あるでしょう。しかし、フリーアナウンサーの長谷川豊氏がブログで述べている「若い男女が子育てよりも自分のことが大好きだから」という指摘的を得ています。確かに結婚すると様々な点で不自由になりますし、子どもができればなおさらです。親にパラサイトして衣食住に不足なく、インターネットや趣味などでそこそこの楽しさを享受している若い人が、赤ちゃんを望まないのも当然かもしれません。本当に価値のあるもの、真の幸せは、すぐ手の届く所でなく若干の苦難・努力の先にあるのは世の習いです。苦労はあっても赤ちゃんのいる幸せを、若い方々に知らせてあげましょう。その意味では当院の助産師が近隣の中学校で行っている、出産や赤ちゃんに関する「命の授業」などは10年後に効いてくる着実な策かもしれません。

少子化対策の提言はこれまでにさまざまなものが出されています。この中でこれぞと思ったのは、産経新聞の「日曜講座 少子高齢時代」に出ていた方策です。それは20代で出産した人に(支援を)傾斜配分するというものです。「女性のライフスタイルに口を出すのか」のかと批判を受けそうですが、どう批判されようと20代で出産するのが女性にとって望ましいのは医学的「事実」です。下図はMenkenらによるScience

誌に載った有名なデータで、女性の結婚が遅くなるほど、生涯子どもを持ってなくなる率が上昇することを示しています。20代で結婚すれば不妊

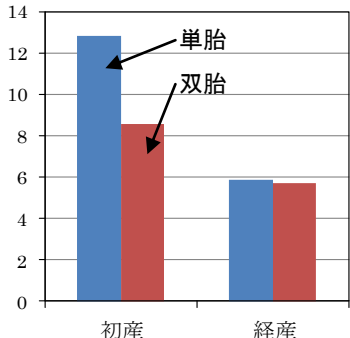


にはなりにくく、20代のうちに最初の子を出産すれば、少子化対策で重要な3人目を産むことも十分可能です。そして脂の乗り切った50歳前後では子どもも手を離れ仕事に邁進できます。このように20代の出産は本人にも社会にも大きなメリットがありますので、十分なインセンティブを与えるというこの方策は、大変有意義であると思われます。

ひ 1人産むよりも双子は短時間
 ≪双胎の分娩≫

双子の出産は帝王切開になる場合も多いのですが、1人目が頭位(頭が下)でその他の条件が良ければ、自然分娩も十分可能です。面白いことに初産の場合、双子の出産は普通の単胎の出産よりも分娩時間が短くて済むのです(図)。初産の出産では子宮口が開大する

のに多くの時間を要しますが、双子の妊娠は子宮口が開きやすいことが要因で、産科の中でも代表的なパラドックス(逆説)です。双胎の出産の出血は単胎よりも当然多いですが、自然分娩ではその差は比較的小さいのに対し、帝王切開すると出血量が著明に多くなります。ですから条件が合えば自然分娩も考慮してよいでしょう。



ので多くの時間を要しますが、双子の妊娠は子宮口が開きやすいことが要因で、産科の中でも代表的なパラドックス(逆説)です。双胎の出産の出血は単胎よりも当然多いですが、自然分娩ではその差は比較的小さいのに対し、帝王切開すると出血量が著明に多くなります。ですから条件が合えば自然分娩も考慮してよいでしょう。

双胎の分娩で2人の赤ちゃんは何分違いで生まれてくるのでしょうか。帝王切開の場合は、子宮の切開創から1人目を取り出して臍の緒を切って助産師に渡し、すぐ2人目を取り出すので大抵1分違いです。経産分娩では(当院では390例の双胎のうち103例が経産分娩でした)、最短2分から最長54分で平均が13.1分、全体の84%は20分以内でした。幸い双胎の経産分娩で23時台のケースはなかったので、2人の誕生日が1日違った例はありませんでした。

双子のお産にはドラマチックな印象深いものが少なくありません。今でも信じられないのが、双胎なのに体重が4014gもあった赤ちゃんです。写真のような華奢な初産婦さんが産んだ双子は、第1子が女の子で2668g、そして第2子の男の子がその4014gでした。当院の390組の双胎の780人の赤ちゃんの中で、2位の3654gを大きく引き離す断トツの1位です。ちなみに双胎の全赤ちゃん780人の平均体重は2398gでした。



もう一つ忘れられないのが、大学にいたときに経験した1人の子が身を呈してもう1人の子を救った1卵性双胎のケースです。この双子は第1児は正常でしたが、第2児が致死的異常を持っていました。1卵性双胎の多くは胎盤が一つで、そこからへその緒が2本出て両児に行きますが、胎盤に2本のへその緒の間を連結する血管が存在します。このため、妊娠・出産中に一方の児の心臓が止まりそうになり血圧が下がると、他方の児がこれを助けようと、連結する血管を通して血液を供給して自分も失血してしまう危険性があります。

この第2児は妊娠中からお産の最後まで頑張って心臓を動かし続けました。このため帝王切開が不要となり、お母さんを傷つけさせませんでした。そして第1児が無事生まれた直後に短い命を閉じたのでした。兄と母に尽くすようにして逝った小さな命は、今でも二人を見守っていることでしょう。秋が深まってくると、ふたご座が天頂高く輝きます。